

ネット型発音練習プログラムを用いた自律学習の実践

—Praat, OJAD, つたえるはつおんの使用を事例に—

鮮于 媚 (埼玉大学、人文社会科学研究科)

The practice of self-study by using Internet-based

Japanese pronunciation learning modules

-Example applications of Praat, OJAD, and Tsutaeru Hatsuon-

Mee SONU, Saitama University

要旨

多様な学習スタイルを考慮し、自律および継続学習を支援することを目指し、実践を行った。実践では、次の点を考慮した。1) 学習スタイルの差、2) 日本語の発音に対する共通的な理解、発音、自己分析を経た修正、3) 継続可能な練習方法の提案であった。授業では、毎回、発音の課題を提示し、学習者は「つたえるはつおん」および「OJAD」を使った理解、その後、自ら録音し、Praatで音響分析し、自己評価をした。結果は、音響特徴と知覚手がかりの一致度が学習へ影響を与える可能性が示唆された。知覚の手がかりと音響特徴が明示的であった有声音および文末イントネーションは学習者による積極的な練習が観察された。これらの自律学習の支援を目的としたことで、学習者からは、多様な方法が提案された。

キーワード：ネット型発音練習，日本語の発音，知覚手がかり，日本語の発音，自己評価

1. 研究目的

本研究は、多様化している学習者のニーズ、レベル、学習スタイルを考慮した授業の方法を検討し、多方向性を持った授業を目指し、その方法を検討したものである。中でも、本研究では、日本語の発音の練習を中心とし、ネット型ツールを積極的に利用することで、

自律学習や継続可能な学習を促した。主に使った日本語の発音練習ツールは「つたえるはつおん」、「OJAD」であった。それに加え、自らの発音を録音し、分析できる音響分析ツール、Praatを利用した。これらの方法は、木下・中川（2019）に提案されたものであり、これらの実践的授業を行うことで、新たな教育方法へつなげる。

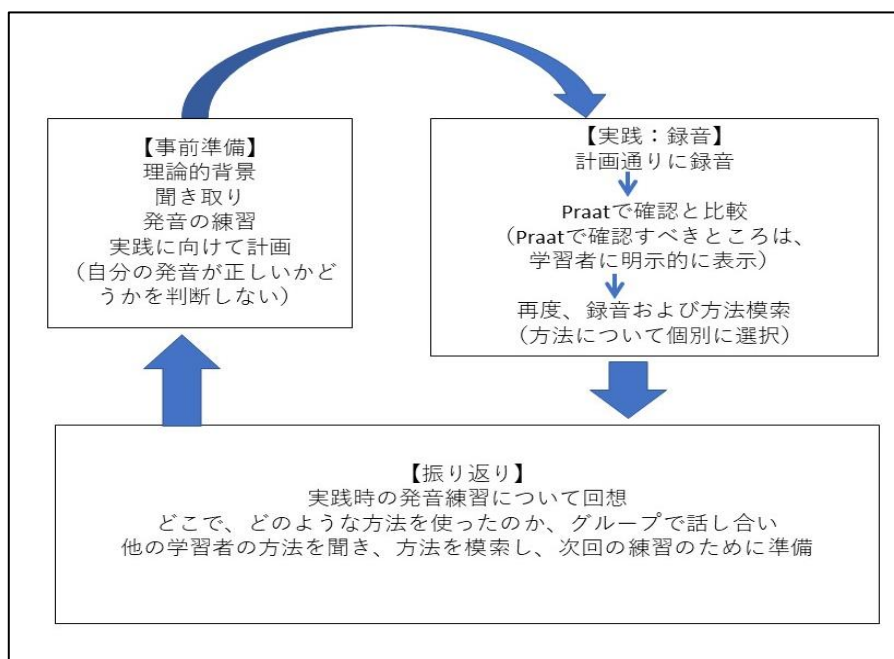
2. 実践の対象と方法

2.1 実践の対象

対象者は、2018年度、埼玉大学、日本語教育センターSクラス（日本語能力試験N1相当）において週1回、90分、全16回の授業を受講した学習者である。日本語能力試験N1相当のレベルであったとしても発音の練習は受けたことのない学習者が殆どであった。

2.2 実践の方法

本実践は、次のことを目標とし、構成した。1) 学習スタイルの差を考慮すること、2) 発音のレベルの多様性に対応すること、3) 自律学習の可能がツールの利用し、継続学習を支援することであった。そして、発音練習の項目は、大きく分けて、1) 有声子音と無声子音、2) リズム、特に、特殊拍のリズム、3) アクセント、4) 文末イントネーションであった。上記の目標および発音練習項目を勘案し、次のような授業の構成を行った（図1）。授業の構成は、「つたえるはつおん」に、提案しているPDCAの学習順序を基本とし、構成した。



<図1：発音練習の実践の構成>

<表 1 : 授業の具体的な内容と流れ>

授業	内容	方法
1回	目標設定	学習スタイル調査、過去の学習経験、発音に対する自己分析
2回	発音の項目を確認	「つたえるはつおん」を見ながら、項目ごとに内容を確認
3回	録音、分析ツール	録音の方法および分析ツールの作業を確認
4回	有声-無声子音	有声子音と無声子音の特徴を把握、聞き取りなどで実施
5回	有声-無声子音	パソコン室で課題を遂行、自ら録音し、Praat上で確認
6回	無声化母音	無声化母音の特徴を把握、聞き取りなどを実施
7回	無声化母音	パソコン室で課題を遂行、自ら録音し、Praat上で確認
8回	リズム	リズムについて把握、一緒に「つたえるはつおん」を視聴
9回	リズム	リズム（特殊拍を中心に）の課題を遂行、録音し、Praat上で確認
10回	アクセント	アクセントについて話し合う。「つたえるはつおん」「OJAD」の視聴
11回	アクセント	アクセントの課題を遂行、録音し、Praat上で確認
12回	イントネーション	イントネーション（文末を中心に）の聞き取り、「つたえるはつおん」を視聴、「OJAD」の韻律読み上げの説明。
13回	イントネーション	イントネーションの課題を遂行、Praat上で確認

3. 実践の結果と学習者の反応

3.1 総合的な結果

実践の結果から、次のようなことが確認された。まず、知覚手がかりと音響的特徴の一致度が影響を与える可能性が示唆された。有声音と無声音を区別する際の条件として、有声子音の声帯振動、いわゆる、ボイスバーは、視覚的に観察しやすく、Praatでも確認が明確であったため、学習者間の話し合いも活発であった。無声化母音についても、同様にPraatで確認することが用意であったため、学習者は自らの発音と比較をしながら、練習をすることができた。同様に、文末イントネーションの場合、Praatでピッチを抽出し、その形状を確認することができるため、目標設定および自己修正、評価が用意であった。

一方、リズムやアクセントについては、特殊拍の時間長の間隔が絶対的でないため、極端に短かったり、長かったりしない限り、気づくことが難しく、どの程度の長さでいいのか、学習者自身が目標を設定する段階で難しさを感じていた。また、アクセントも同様に、どの程度のピッチを調整すればいいのかが分からない場合があった。さらには、文末イントネーションではない場合、感情表現をする際のイントネーションについては、明示的な確認が困難であったため、Praatの分析までつながらなかった。

3.2 学習ノート振り返り

今回の実践では、学習方法を自ら探す、模索することが目標の一つである。表2は学習者が選択した学習方法の一例である。本稿では、代表の3名の内容の一部を抜粋した。

<表2：学習者のノートの内容の一部>

学習項目	学習ノートの内容
目標設定	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意思を正確に相手に伝える。 ・アクセント、リズムの聞き取りに問題がある。 ・曖昧なイントネーションをきちんと区別ようになりたい。
有声-無声子音	<ul style="list-style-type: none"> ・有声音を出すのが難しいが、自分にとって、「ん」を入れて発音するのが自分に向いている。体を使う方法もあるが、自分には合わなかった。
無声化母音	<ul style="list-style-type: none"> ・母音の無声化を練習する時に、ことばをローマ字に想像して、無声化しているところの母音を取る。 ・無声音はPraatで分析し、母音があるかないかを判断する。
リズム	<ul style="list-style-type: none"> ・ビートに合わせて発音の練習をした。 ・詩を流暢に読めるために詩に一旦止まって息をするところを書きくわえた。
アクセント	<ul style="list-style-type: none"> ・知らないアクセントを教科書やOJADで調べる。 ・高く発音するところを書き入れる。
イントネーション	<ul style="list-style-type: none"> ・OJADで正しいイントネーションを調べる。 ・日本人に正しいあいづちをたしかめる。

4. まとめと今後の課題

本実践では、上級学習者の多様な学習や学習方法を考慮したものである。授業では、多様な学習方法を提案し、学習者は自ら自分に合った練習方法を探した。今回は、上級学習者であったため、学習者自身の発音に対する問題意識や聞き取りにも問題がなかったが、これらの方法が初級学習者、中級学習者にも適応できるかどうかについて調査をする必要がある。

参考文献

木下直子、中川千恵子(2019)『一人でも学べる日本語の発音－OJADで調べてPraatで確かめよう－』ひつじ書房。

オンラインアクセント辞典 (Online Japanese Accent Dictionary) <http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/> (最終閲覧日2019年4月17日)

つたえる はつおん <http://japanese-pronunciation.com/> (最終閲覧日2019年4月17日)

Praat <http://www.fon.hum.uva.nl/praat/> (最終閲覧日2019年4月17日)